

3月11日を迎えて、

平成24年3月11日

医療法人誠愛会 原町中央産婦人科医院

院長 高橋 亨 平

3月11日を迎えて

地球が太陽の周りを1回まわって1年は過ぎた。あれから何という1年だったのか筆舌で語り尽くすことは出来まい。悲しみと絶望、そして少しばかりの希望、混乱の中、ただ、のんびり歩く者にとっては気が遠くなるほど長い1年であったであろう。しかし、急ぐ者にとっては何と短い1年であったことか。厳しい落差のありすぎる日本国、そして国民であったと思う。ある者は、一方で救いの手を差し伸べながら、別の手で殴りつけ、放り投げる。何という理不尽で、わけの分からない行為であったことか。

無知ゆえの罪は悲しい。子供が悪さをして、それが原因で人が死ぬ、しかし、子供には何の事か分からない。こんな子供には、意味不明の“絆”という文字、使って欲しくない。

福島を除く東北3県の瓦礫の処理、放射線は殆ど自分の環境と同じ量なのに、反対する無知と我侷、その遅れにより、復興が立ち行かず、何も進んでいない、これから何年かかるか分からない未来に、其々の町は滅亡の狭間にあることは事実である。高齢者は特に短い未来がゆえに、苦しみ、絶望し、悲しむ、その事により多くの弱者、病人が死んでいっている現実を、看過する事は出来ないはずである。

人生という土俵にすら未だ上れず、そこのレベルにあがれないまま、ただ、死んで行くだけの人生を選ばざるを得ない人達が増えている。毎日、先が見えない事の恐怖、やる事が無い、もう疲れた、死にたいと訴える人が増えてきている。復興と言う長い“人参”ではなく、明日を生きていく、近い道しるべと、ささやかな希望を早く与えてほしい。そのための救急車を早く出発させたい。

無知故の罪は福島県も同じである。総理大臣や各大臣は南相馬市を訪問しているが、福島県知事や副知事、県の部長クラスは震災及び原発事故後、南相馬市をあまり訪問していない。南相馬市に対する対応は極めて非情であった。何故だろうか？ 勿論、何かがあるからであろう。一番恩恵を蒙ったはずの県なのだが、悲しいかな、何も出来なかった。愚かとしか言いようが無い。

縦横無尽に張り巡らされた規制、法律、民の為にあったのではないのか？
重症高血圧の満期近い妊婦、常位胎盤早期剥離、子癇の予防のため、母児共救命のため、緊急搬送が必要となり郡山市の病院に転送が決まった。しかし、救急車に乗せるや否や、救急車は逆戻りした。往復及び検査で約30分をかけて保健所に戻り放射線量を測定し、その証明書がなければ、搬送は出来ないとのことであった。何と愚かな！！ その間の命は誰の責任なのだろうか、こんな愚行が行なわれていたのである。避難しホテルに泊まるためにも、ガソリンが無いのに、設けられた関所までに戻って、証明書を貰わなければ、泊れなかったのである。関所には、放射線医学研究所の放射線技師達が退屈そうに、又、得意げに計っていたのは腹立たしい。他にもっとやる事が、無限あるだろうと、大きな声を出して云うべきだった。・・・と今でも後悔している。

何も知らずに戦っていた日々、今は、昨年5月から計っているフィルムバッジのデータをグラフ化し、一人一人が全員右下がりの傾向を示している。又、ホールボディカウンターから、内部被曝も、もはや異常値を示す人は殆どいない。このことは、南相馬市での生活は、現在の範囲で云えば、殆ど支障はないものと考えられる。但し、食べ物、飲み物だけは注意しなければならないだろう。

1つ1つデータを取りながら、確認しながら前進するしか方法は無いと思う。だから農業もやらなければならない。畑も作らなければ除染は進まない。問題はその後どうするかであろう。汚染米或いは風評被害で売れない米は、国で買い上げ、アルコール精製プラントを南相馬に作り、雇用し、生産された燃料は公共の自動車の燃料として買い上げる。稲藁や草はその他は、バイオマス発電所を作り、雇用を発生させ、発生した電力は買い取る。畑には菜の花やひまわり、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ等をつくりジーゼル燃料にするプラントも出来る。何でも出来ない事は無いのである。そして耕作をする事により除染されることを知るべきであり、そのデータを、世界に示すべきである。

次世代のエネルギーと復興を組み合わせなければ、せっかくの予算を使って何も残らない事にはしたくない。

いずれにしても、何もしないでただ逃げているだけでは、何年待っても何も起こらないし、故郷が廃墟になってしまう事だけは確かである。

セシウムによるガンマー線は目に見えない光、光子、電磁波である。放射線量は距離の二乗に反比例します。即ち、2m離れば4分の1に減り、5m離れば25分の1に減少し、殆どとどかないのである。従って、仮置き場を作ったとしても、5mの柵を作れば殆ど無害である。びくびくしたり、反対した

りする気持ちは分かるが、それでは誰も救ってはくれまい。復興が永遠に進まないだけである。一步前へ進もう、たかが3年ではないのか、方向を見失ってはいけない、急いでいる人たちは、たくさんいるのだから。

1年経って思う事は、私達は、長崎、広島から、何を学んだのだろうか？ 何の選択肢も無かった彼らは、その汚染された土地で農業をやり、水を飲み、生き抜き見事に復興を遂げたのである。その経験を長崎の医師からの手紙で知った。彼の義叔父が爆心地に近いところから生還し、現地の医学校での経験や色々と語り継いでくれ、そして福島のことを心配していた。ありがたい。

歴史は必ず繰り返すだろう。我々は後世に参考になる何のデータを残しただろうか。何よりもその事が辛い……。日本は世界に冠たる先進国ではなかったのか？ 開発途上国以下の遅い対応、学問を重視しない非科学的行政、無知で臆病な学者達……。悲しい。